歴史が紡ぐ国際交流と社会統合の学び

杉本　裕樹

1. はじめに

約 1 週間の日程で、第 21 回尼崎市青年使節団の団長として、姉妹都市であるアウクスブルク市を訪問しました。両市は直線距離で約 9,300km 離れており、島国である日本と、ヨーロッパ大陸の中央に位置するドイツとでは、歴史や周辺国との交流状況も異なります。しかし、尼崎市とアウクスブルク市は、現在もさまざまな分野で利用されているディーゼルエンジンの発明者ルドルフ・ディーゼル氏と、小型ディーゼルエンジンを実用化したヤンマー創業者・山岡孫吉氏とのつながりを契機として姉妹都市提携を締結し、その後 60 年以上にわたり交流を続けてきました。

今回の青年使節団は、若い団員 8 人に、団長、副団長等を加えた計 11 人で構成されました。出発前には、これまでの国際交流の経過に加え、尼崎市の歴史や魅力、現状など、使節団員として交流するために必要な知識の習得に努めました。また、送別会でどのように日本文化を伝えるかについても検討するとともに、行動を共にする滋賀県長浜市の団員とも交流し、使節団としてのつながりを深めてきました。

2.　出発からホストファミリーとの対面まで

出発は令和 8 年 8 月 29 日午前 10 時 50 分、関西国際空港からでした。乗り継ぎ地であるシンガポールのチャンギ国際空港で長浜市の青年使節団と合流し、翌朝 6 時 30 分にドイツのミュンヘン国際空港に到着しました。7 時間の時差や長時間のフライトの疲れ、入国審査への緊張もありましたが、空港出口で出迎えてくださったアウクスブルク市のグルーンさん、Yoshimi さんなどから歓迎の挨拶を受け、お互いの出会いを喜び合う中で、いよいよドイツでの生活が始まるのだという実感が湧いてきました。

空港からアウクスブルク市へ向かうバスの車窓からは、日本とは異なる植生の森や畑、時折見える風力発電の風車などを目にすることができました。市街地に入ると、石畳や伝統的な石材等を用いた建築物が立ち並び、その風景からも日本との違いを自然と実感しました。昼食会場では、アウクスブルク市の伝統的な民族祭である Plärrer(プレラー) が開催されていました。大きなテント式レストランを中心に、観覧車やゴーカート、急流すべりなどの遊具、体験型アトラクション、くじ引きなどの移動式遊園地が並び、多くの人々でにぎわっていました。

昼食後は消防団本部を訪れ、火災のみならず、事故、救助、化学物質対応、列車事故、動物救助、水難対応など、極めて幅広い事案に対応する消防体制について説明を受けた後、ホストファミリーとの対面となりました。団員たちは事前にメールで連絡を取り合っていましたが、初対面であることから緊張した様子も見られました。それでも挨拶を交わすうちに、それぞれのペースで会話が始まり、1 週間にわたるホストファミリ

ーとの生活がスタートしました。

3. アウクスブルク市内の視察と表敬訪問

2日目は、姉妹都市提携のきっかけとなったディーゼル石庭園や、開園90周年を迎える植物園の一角に整備された日本庭園などを視察しました。庭園の構成には、水、石、植物の調和が重視され、通路を直線にせず曲線的に設計するなど、日本庭園の思想が反映されており、時には日本から庭師が訪れて手入れを行っているとのことでした。こうした場所が適切に維持管理されていることから、両市の交流の歴史が大切に受け継がれていることを感じました。また、アウクスブルク市民にとっても憩いの場として親しまれている様子を拝見しました。移動の途中には、「尼崎通り」「長浜通り」も確認することができました。

午後からは、世界最古の社会福祉住宅といわれるフッガーライ、グランドホテル・コスモポリスを視察しました。コスモポリスは、人道的プロジェクトとして、もともと介護施設として使われていた建物を活用し、2011年から構想が進められ、2013年に難民支援と地域交流の場などとして開設されたとの説明を受けました。資本金を持たずに出発し、家具や備品、改装資材、労働力までも寄付やボランティアによって賄ってきた点は特筆すべき点です。

また、企業の商品テストの場として活用するなど、単なる寄付に頼るのではなく、相互に利益がある形を模索してきたことも印象に残りました。難民居住機能やホテル、レストラン、芸術活動の場の運営のほか、就労訓練や交流イベントも行われており、難民支援を単なる保護にとどめず、社会参加や地域交流につなげる仕組みとして構築されていました。セキュリティがないことや、ホテルやレストランの料金を利用者自身が決める仕組みなど、一見すると継続的な運営が難しいと思われる事業を実現している原動力は「情熱である」との言葉には、大きな自信が感じられました。利益を追求するのではなく、善意と熱意がなければ成り立たない事業であるともお話は、持続可能な地域共生の在り方を考える上で示唆に富むものと感じました。

3日目は、シュヴァーベン行政庁の施設であるロココホールでの表敬訪問から始まりました。ロココ様式特有の華麗で繊細な装飾や天井画、彫刻に囲まれる中、デルフラー教育長、在ミュンヘン日本国総領事館の別所総領事、市議会議員らに迎えられ、尼崎市、長浜市、アウクスブルク市の交流の継続に対する歓迎と敬意の言葉をいただきました。私からは、尼崎市市制110周年のキャッチコピーである「つなぐ つながる うごきだす」は、アウクスブルク市とのこれまでの交流の歴史そのものであり、今後も良好な関係をさらに発展させ、その価値を多くの市民に発信していきたい旨をお伝えしました。当初は緊張から団員がふらつく場面もありましたが、温かい御配慮もいただきながら、和やかな雰囲気の中で訪問記念の署名まで無事に行うことができました。

その後は、市場を見学したのち、市立図書館を訪問しました。そこでは、昨年度の青年使節団団長であったフォトナー図書館長から、図書の貸出だけでなく教育や成長を促すためのさまざまな取組として、読書会や講演会、音楽スタジオ、会議室の利用、さらには楽器、ミシン、ゲーム機などの貸出まで行っており、図書館という枠組みの捉え方

次第で多様なアプローチが可能であることを学ばせていただきました。

午後から団員が伝統的民族衣装の試着やプッペンキステ人形博物館の見学を行っている間、私はアウクスブルク市民大学（VHS）を訪問し、外国人（移民・難民等）への語学学習支援や就労支援について学ばせていただきました。

市民大学では、生涯学習としてさまざまなテーマの講座が提供されており、移民向けのドイツ語学習もその一つとなっています。日本でも外国人受入れの拡大が進んでいますが、地理的条件などの違いはあるものの、ドイツには戦後から移民や難民の受入れの歴史があり、現在はEU外の移民に対して、家族を含めドイツ語習得が義務付けられているとのことでした。また、学歴を問わず誰もが低料金で受講できる制度で、各都市で行われているとの説明を受けました。市民大学のプログラムは半年ごとに編成されており、言語、芸術、文化、ビジネス、デジタル、健康など幅広い分野で年間約3,000コースが提供されている。特に移民向けのドイツ語コースでは、語学習得だけでなく、歴史、コミュニケーション、生活習慣に関する内容までがカリキュラムに含まれた総合的な社会統合支援となっており、最終的には習得認定テストを受けることになるそうです。なお、日本語コースについても、受講希望が多く漫画やコスプレ文化の人気を背景に13コースが設けられているものの、講師不足のためこれ以上増やせないとのお話もありました。





グランドホテル・コスモポリスの見学



市立図書館



団長の専門会議
アウクスブルク市民大学（VHS）

4. 世界遺産をはじめとした歴史的建造物等

4 日目以降は、地元サッカーチームの FC アウクスブルクの本拠地である WWK アレーナ、アウクスブルク市へと流れるレヒ川沿いのフュッセンの遊歩道、観光名所であるノイシュヴァンシュタイン城、世界遺産に登録されているアウクスブルクの水管理システムやヴィース教会を視察しました。また、職業訓練センターでは、経済的課題や精神的な困難を抱える若者に対し、実習、座学、専門的支援を組み合わせた就労支援を行っており、IT、自動車整備、木工、販売、栽培、クリーニングなど 25 種類の職業訓練が提供されていること、学校制度の違いなどについて説明を受けました。



職業訓練センター

さらに、ダッハウ強制収容所では、ナチス政権下における抑圧と迫害の実態について学びました。収容対象はユダヤ人に限らず、反政府的とされた人々や社会的少数者にも及んでおり、残された建物や資料、追悼施設を通じて、戦争の犠牲者が置かれていた過酷な状況を感じ取るとともに、戦争と人権侵害の歴史を風化させないための努力が続けられていることを実感しました。

このほか、ミュンヘンの BMW 博物館や、レジデンツ・セレナーデでの音楽鑑賞会など、技術の発展や文化に触れる機会もいただき、社会制度の違いなどを感じながら、大変貴重な体験をさせていただきました。

5. 送別会とホストファミリーとの一日

送別会には、ホストファミリーの方々に加え、ディルク・ヴルム第 2 市長、在ミュンヘン領事館の山形副領事、歴代の使節団関係者や国際交流関係者など、多くの方々に御参加いただきました。多くの支援者に囲まれ、改めて姉妹都市交流が幅広い市民の支えによって成り立っていることを感じました。尼崎市青年使節団は、日本文化を交えた全員参加型のクイズと折り紙教室を実施しました。クイズでは、各テーブルに日本文化に精通された方がおられたこともあり、急きょ準優勝チーム同士の代表者によるじゃんけんで順位を決める場面もありましたが、大いに盛り上がり、折り紙教室を含め、皆さんに楽しんでいただくことができました。

また、滞在期間を通じて、ホストファミリーとの交流は団員にとって非常に大きな経験となりました。送別会の翌日も、ミュンヘンやウルム、ネルトリンゲンなどへホストファミリーと出かけ、1 日を共に過ごしながらドイツ観光を楽しみ、公式行事だけでは得られない学びと相互理解、つながりが生まれているように感じました。

6. 最後に

日本とドイツでは、歴史的経過も、周辺諸国との関係を含む地理的条件も大きく異なります。街中には石畳が広がり、デザインや高さに統一感が感じられ調和した建物群の

中にルネサンス様式やロココ様式の建築が溶け込み、路面電車が走る道路を自動車、自転車、歩行者が行き交っています。外国籍や移民背景のある住民の割合は、49%超とのことで、社会統合に向けた取組は、古くから進められています。

今回の訪問では、そのような違いを感じる一方で、伝統を大切にする心、相手を尊重する姿勢、社会的弱者への支援、文化の継承に対する熱意など、根底に流れる価値観には私たちと共通するものがあると感じました。団員たちも、各種プログラムやホストファミリーとのふれあいを通じて、日本とは異なる文化、環境、言葉の中であっても、互いに理解し合い、つながることができたと実感したのではないかと思います。

その気持ちを忘れず、お世話になったホストファミリーの方々や団員同士のつながりが今後も続くことを願っています。そして、団員たちが今後それぞれ社会の中で活動していく中で、アウクスブルク市での素晴らしい出会いをはじめ、今回の経験を多くの人に伝え、つながりの輪を広げていってくれれば、姉妹都市である尼崎市とアウクスブルク市との結びつきが途切れることはないでしょう。

最後に、団員たちを温かく受け入れてくださったホストファミリーの皆様、多くの場所への案内や通訳として同行し、バスの運転まで担っていただいたロメル夫妻、視察先施設等の皆様、同行いただいたアウクスブルク市関係者の皆様、そして最初から最後までお世話いただいたグルーン氏をはじめ、多くの方々の心のこもったおもてなしのおかげで、貴重な経験と学びを得て帰国することができました。ここに感謝の意を表し、心より御礼申し上げます。